

日間船上待機となり、五月十一日に上陸しました。そして宇高連絡船に乗り高松に五月十八日に帰りました。四年四カ月ぶりの帰宅でした。

広島島の惨状に息を飲み、機関車の上に乗る者もいました。家族は全員無事で、突然の私の帰国を喜んでくれました。

終戦後、いろいろ苦労がありました。軍隊当時の苦労に較べれば、命に関わる問題は全くありませんでした。復員後、民生委員以外の公職はやりませんでした。推されて町会議員を三期勤め、一時は十六の役員をやったこともありました。生来の健康に恵まれ、現在でもスポーツ振興会の役員、水利組合、体育実行委員会、カラオケ会の会長（十六年目、会員二〇〇人）、五十歳バレーボール会長、結婚相談委員等の役職をこなしています。出て行くことが健康管理に良いと思いません。現在、家ではタバコ、米、それに果樹をやっています。父は八十六歳まで働き八十九歳でなくなりました。

満州当時の者が集まって戦友会をやっていますが、

会員は五分の一ぐらいに減ってきました。ライオンズクラブにも入りましたが、県外出張と寄付が多くて途中で止めました。

回想

愛媛県 根本 秀徳

私の出生地は、関東の佐倉です。家族は両親と、私が長男で弟三人、妹二人の六人兄弟と、祖父母を加えた十人家族で、全員健康で幸福な家で笑い声の絶えない家でした。家業は田地九反歩余・畑地約一町歩の合計二町歩で（機動力は無くすべて人力）、家族全員が力を合わせて農耕を行い、朝に霜を踏み、夕べに星を頂くように励みました。お陰を持って生活は楽な方でした。

私は特に読書が好きで、世に言う「晴耕雨読型」でした。祖父が「秀徳は家督を相続せず、何か別の世界に進む男だ」と申しておりました。そして笑いながら

「十歳で神童、十五で才了、二十歳過ぎればただの人間かな」と言っておりました。近隣の子供達もそれぞれ家業を手伝い、弟妹の面倒を見たり、中には他家の子守や手伝いをして、生きるということに一生懸命働いた時代でした。精神的には麗しき時代でした。

また佐倉は、古くは佐倉藩の城下町で十七万石位でした。藩主は幕末の老中職を勤めた堀田殿様で善政を施行され、民衆から敬慕された偉人でした。

陸軍は東京第一師団（秘匿号・玉兵团）は徵募区が歩兵第一連隊（東京）、歩兵第四十九連隊（甲府）、歩兵第五十七連隊（佐倉）で、古の関東武者の出身地です。玉兵团は満州に出動し、北滿鎮護の任につき、対ソ連作戦のために日夜訓練に励み、関東軍の精鋭師団として研磨していました。

昭和十九（一九四四）年に南方の風雲急を告げ、山下奉文大将に引き抜かれて、フィリピン戦線に転進し、ルソン島からレイテ島では玉砕戦法にて壊滅しました。

私は小学校から旧制の県立中等学校に進学し勉学に

励みました。三年生の時「二・二六事件」で青年将校が昭和維新だと蜂起したと知らされ、配属将校が全校生徒に自粛命令を出されたのを子供心に「大変な事が起こった」と動揺しました。翌年の夏休みの時に推奨されて軍人志望の検査を受け、見事合格しました。

昭和十二年十二月一日、陸軍予科士官学校（市ヶ谷）に入學通知を受領し、同日入學しました。旧制中学校における配属将校による軍事教練は士官学校に比べると子供だまして、雲泥の差でした。一生懸命に勉学に励みました結果、昭和十三年十月三十日無事卒業しました。

翌日付にて第八師団歩兵第十七連隊に上官候補生として入隊です。隊は満州国綏西という所にあります。汽車を乗り継ぎ、門司から釜山へ渡り、大陸鉄道で朝鮮の龍山から日本海沿岸を北進し、豆満江から図們へと国境を通過し、綏芬河の東・ソ連との国境を眼前に（最前線地帯）の西歩兵第十七連隊へ着任しました。十一月ですが厳冬の如く寒かったです。零下十余度ですが本当に寒かったことが今でも一番に思い出されます。

歩兵第十七連隊は秋田県が徵募区で、兵員は大部分秋田出身でした。古年次兵が大きな声で、お国訛り丸出して「秋田おぼこ」を歌っておりました。なお歩兵第五連隊は青森、弘前は歩兵第三十一連隊、山形は歩兵第三十二連隊が主幹で、明治三十（一八九七）年創設され、昭和十二年渡満して第一線の重責を務めた東北健児の強兵集団でした。

第八師団（秘匿号・杉兵团）は北満より南方戦線に転進し、玉兵团と同じ運命で玉碎戦闘を敢行して消えました。歩兵第十七連隊に着任時は、広漠たる原野に設営された兵舎は平屋作りですが、壁は五〇センチ位の泥煉瓦でできており、防寒防暑には充分役立つようでした。夏は暑気を通さず冬季は冷気を遮断し、丸ペーチカで室内温度は高く肌着一枚で充分のようだった。候補生として充分体験しました。

昭和十四年三月一日、士官学校入学のため厚木（相武台）へ帰りました。陸士第五十四期生です。

昭和十五年九月四日卒業、見習士官に任ぜられました。特に航空技術者養成の急務が求められた時であっ

たために、歩兵科から飛行第二十四戦隊へ赴任、立川の陸軍航空技術学校へ入校しました。私としては、飛行機のこと何一つ知識が無いので大変なことでした。

同年十月二十五日、任陸軍少尉・飛行第二十四戦隊付のまま、航技校学生で航空技術を勉強させられました。

昭和十六年七月末日まで、飛行機と取り組み、機関の解体・組み立て・機体の整備・調整等を徹底的に行いました。また練習機（赤トンボ）に機乗しての猛訓練、後座にベテランの軍曹が乗って、伝声管にていちいち命令を発し、急上昇・急降下・左右への急旋回等々で、当初は三十分程の機乗訓練で全身汗だくでした。

同年八月一日満州国海拉爾、第二十四飛行戦隊へ赴任、十月一日陸軍中尉に任ぜられました。満州全域にわたり、関東軍特別大演習（関特演）が実施されました。この年の春頃から、充員召集で兵力の集結を計

り、夏頃の最盛期には関東軍百万満州全域に皇国軍人が充満していました。

私の戦隊は沿岸州から、ウラヂオストックが攻撃目標でした。以後逐次、中国大陸や南方方面に各部隊・兵員の異動が行われました。その年の十二月八日に大東亜戦争が勃発しました。私はこの時、ちょうど台湾の最南端の潮州飛行場に勤務しておりました。当時数日来、緊急整備命令が出ており九七式戦闘機三十機の完全整備を行い、弾丸も充分に、燃料も満タンと搭載完了しました。

十二月七日深夜というか、はたまた八日払暁という時間帯に非常呼集でした。その時点では陸軍部隊がフィリピンのリンガエン湾に向かって進撃しており、全機出撃して地上部隊を援護し、敵空軍の襲撃を阻止し、なおかつ敵の空軍基地を殲滅すべしとのこと。これで大戦争の火蓋が切られました。初戦は破竹の進撃で戦捷気分に浸りました。

昭和十七年二月十五日、第二十四飛行戦隊は満州海拉爾に移動しました。比島戦線において、敵米空軍機

と日本の飛行戦隊の優劣に格差を感じ、機種改革・変更が急務でした。機種も一式戦に改まり、昭和十七年六月二日、海拉爾を飛び立ちました。北京―台湾（屏東）―支那広東、天津飛行場等々に移駐し、桂林攻略戦に参加しました。

昭和十七年十月二日より翌年三月三十日までの間、サイゴン、シンガポール、スマトラ島、パレンバン等々各地において、それぞれの南方防衛作戦に参加しました。その間には現地人と相和して、スコール（毎日・回必ず来る夕立雨）を浴びたこともありました。各地の戦闘も空中戦であり、大変なこともたくさんありました。

昭和十八年四月一日、陸軍航空整備学校に入学、上層部から命ぜられ「立川にて整備能力を高揚せよ」でした。このころには陸軍一式戦闘機は関東方面に回し、帝都防衛の任につきました。

昭和十九年三月一日、陸軍大尉に任ぜられ、同月整備学校卒業。飛行第四戦隊の整備隊長になりました。任務は北九州地区の防衛でした。隊員四百人、多い時

は六百人位でした。山口県小月飛行場（現在自衛隊使用）で、双発戦闘機の全力整備です。その内容は、機関部の整備修理、銃火器点検・弾薬補充（戦力が弱ってきた頃には、弾丸も二〇〇発を一〇〇発にし、さらに一〇〇発を五〇発に減らすという状態）、外部破損箇所の修繕・車輪の修理（パンク直し）でした。

双発機は二人搭乗機です、前座者は操縦並びに前方火器の操作（射撃）、後座者は通信と上・下・後方警戒と敵機に対して射撃や応戦です。一式戦闘機と比較すると二式は双発なのに上昇速度が遅く、二人搭乗で有利のようでしたが、実力の程度は、今一つということでした。

注 各飛行場には特設飛行場大隊があり、その飛行場の一切を取り仕切っていて、警備及び滑走路の管理・食料の確保まで担当していました。

私達の双発機は夜間戦闘専門機でした。七、八千メートル位上昇すると酸欠になり、酸素ポンペを背負って夜間出撃しておりました。敵機も日本空軍機の

肉弾突撃を恐れて、夜間の襲撃が多くなりました。松根油を使用して飛行機を飛ばすとは残念至極でした。小月飛行場も全飛行機を夜明けと同時に発進させて朝鮮の大邱飛行場へ避難させ、また日暮れになると帰って来るようなこともありました。この頃は、訓練機赤トンボも戦闘用に使用すべく準備していました。

私の飛行戦隊が、西部軍司令官・畑俊六人将より「感状」を受けました。下賜金として、当時の金額で三千円位でした（古い事ですす正確ではありません）。

この頃隊員から多くの戦死傷者を出しました。爆撃等により尊い犠牲者も出ました。

昭和二十年四月、下宿生活も何かと不自由だろうと、人にすすめられて妻を娶りました。戦況は本土決戦の可能性が強くなりました。自隊の主任務は八幡製鉄所が一番重要であって、これを敵機が狙って来るから防衛せよ、でした。この時点において双発二式戦闘機は三〇機程度保有していました。八月の原爆投下後の広島を通過しましたが、原爆症にもならずすまました。

かくして天皇陛下の終戦詔書です。小月飛行場にて
全隊員と悲涙に咽びました。

現役軍人終焉

昭和二十年九月三十日待命予備役。

戦後、妻の実家の山口県岩国と私の故郷佐倉を往復
して生活していました。

帝国人絹株式会社（現帝人）が守衛を募集しており
ましたので、ここに就職しました。そしてテトロン部
門が愛媛県松山市に松山工場を建設することとなり、
私もそうした縁で松山の住人となりました。そして戦
後の難関を乗り越えました。

振り返りますに、多くの人々が戦争の犠牲となられ
ました。護国の英霊の泰らかな眠りを心より祈念申し
上げます。合掌。

追伸 北に南にと飛びまた走り、五体無事に任務を
終了し、八十余歳までも長生きしました。

当座なすべき御奉公ができず、十分な活動もなく、
不忠不孝につきましては、いかように申されまして

も、甘受致します。

不戦を誓い二度と戦いの無きを願っています。

私だけの人生

特別攻撃隊員

岩手県 加美山 茂

昭和二十（一九四五）五月十七日、基地副長、岩城
中佐より「菊水作戦に参加するために明朝鹿屋に移
動、出撃するようにせよ、隊の編成は四機とする。
しっかりやってくれ」との命令と激励を受けた。しか
るべき時が遂に来たと、頭の中が白くなるような思い
がした。

翌十八日、朝四時起床、といってもほとんど前夜は
眠れず過ぎしたが、列機の搭乗員に声をかけ、それぞ
れ身支度をして防空壕のベッドから隊舎の食堂に行
き、主計課心尽くしの朝食を摂り、残る隊員達に囲ま
れて、声を掛けられ励まされ飛行場の戦闘指揮所に